

42
42
42

人工的生命拒否で

死の尊厳“声明採択”

米医師連

【ロサンゼルス五日電】近藤特派員「絶望とわかった患者でも、あらゆる手を尽くして、例え一秒でも長く生きさせるのが医師の務め——というのはもう時代こそわなくなつたのか。米医師連盟（AMA、会員二千万人）は四

日、カリフォルニア州アナハイム市で開かれている年次総会で「患者に対して最終的措置は、患者および家族の意思に従う」という声明を採択した。これは、死の尊厳、声明と名付けられ、全米三十二万人の医師の指標となる。

声明の要旨は「生物学的な死が迫っているという否定し難い証拠が出た場合、生命を長引かせる特別な措置を施すかどうかは、患者本人あるいは家族の決定に従う」というもの。例えば患者の意思を無視して、機械装置で心臓だけを

動かし続けたり、いつまでも強心剤を打ち続けたりする必要はないというわけだ。声明起草に先立って、医師連盟は州単位の医師団体ごとに世論調査をしたほか、総計一億人以上の信者を代表する教会各派にも文書

で意見を求めた。その結果、安楽死にはほとんどが反対だったが、医学界、宗教界の総意として「死の尊厳は犯すべからず」という結論が得られたという。

声明のきっかけとなったのは、昨年六月、コネチカット州代表から提案された、死の尊厳契約書システム。これは「人工的な措置を取らずに死なせてほしい。たとえそのために死期が早まっても、苦しみをやわらげるよう投薬してほしい」などと書いた文書を医師が用意し、患者がサインすればこれに従おうというものだったが、文書の採用は見送られた。

先月十三日、心臓発作で死去し「をかたどった菊の花がびっしり。」が終わると、山口社長は天皇、

